

# 日本人のみた外国 花束とチョコレート 南米で快適に過ごす必須アイテム(?) (カルチャー・ショック)

著者	上谷 直克
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	134
ページ	49-49
発行年	2006-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005373">http://hdl.handle.net/2344/00005373</a>

## 花束とチョコレート——南米で快適に過ごす必須アイテム(?)

上谷直克

「この国の女の子には、花束とチョコレートが効果的よ(笑)」。これは私が初めて南米に留学し、女友達へのプレゼントに窮した際、度々耳にしたセリフであった。確かメキシコ滞在時の大家さんにも、チリの女友達にもこんなアドバイスをもらった気がする。むろん、(たぶん)世界中どの国でも、綺麗な花を贈られて喜ばない女性はいないだろうし、チョコに限らず、そして男女を問わず、甘いものはまさに「お口の恋人」と言えるのかもしれない。しかし、花を贈るといえばおよそ母の日や歓送会、そして、チョコを贈るといえばバレンタインデーという、あまり面白くない社会に育った私の中に、こんな素朴なアドバイスがとても新鮮に響いたのだった。

たしかにそういうと、南米の日常には、街中で気軽に花束やプレゼント用のチョコを買う・贈るチャンスだけでなく、そんな日本人からするとちよつとハズカシイ行為を温かく見守る雰囲気もが遍在していた。

花を贈ることについてはとくにそうだった。確かに様々な問題点もなきにしもあらずだが、道端や公園やデパートスポーツに必ずといっていいほど出没する(出没してくる!)小さな花売りたちは、時として鬱陶しくもあるが、いま思ひ起(こ)すとずいぶ

ん「使える」存在だった。そして、そんな「花を贈ること」が決して特別なことでない環境にいると、感謝や贅美を花束に込めることがハズカシイことでもなんでもなくなるから不思議なものだ。こんな環境の後押しもあり、私は度々「花束攻撃」を繰り返すことになるのだが、たとえ「両手いっぱいの花束」でもかなり手ごころな値段で手に入るのだから、こういう意味でも貧乏留学生にとってはありがたいアイテムであった。

そして、チョコレート。これにも、花束とは違う文脈でお世話になってきた。外国生活を始めると、言葉・慣習・制度などの違いから、旅行では味わえないトラブルや危機に見舞われがちになる。しかし、そんな時だいたい救いの手を差し伸べてくれたのが、現地の(他人の)オバちゃん(おネエさん?)たちだった。もちろん、しばしばオッチャンが助けてくれることもあるが、やはり、人種や国籍や性別の違いなどろともしない、強引なまでの親切さにおいて「オバちゃん」ほど頼りになる存在はない。大家さんにはじまり、隣人、大学や役所の窓口、近所のレストランや売店:スペイン語もままならず、かなりの慌て者で、しかも「質問好き」な私は、至る所でたくさん

のオバちゃん(おネエさん)達の手を煩わせた。そして機会を見つけ、彼女たちに感謝の気持ちをこめたチョコを手渡すと、訝しい顔一つせず、素直に「どうもありがとう。でも、あなたはそんなに私を太らせたのね!(笑)」と応えてくれたものだった。ちなみに、この「チョコレート」について、私は出張でホテルに滞在し、毎朝外出するときに、お約束のチップ数ドルと「ありがとう!」と書いた紙切れに、チョコを一つ添えることにしている。もちろん、そもそもは、チップというあまりにも形骸化し無味乾燥な習慣に、自分なりの労いと感謝の気持ち添えようと始めたに過ぎないが、これまでホテルの長期滞在で一度も不愉快な思いをしたことがないことをふまえると、これはこれでなんらかの効き目があったのかもしれない:ということにしておこう。

いずれにせよ、南米には、様々な想いや感情を率直に表現し、またそれとして素直に受けとるという関係性があり、まさに「花束とチョコレート」はそんな関係性を上手く成り立たせる格好のアイテムに思えるのである。

(うえたに) なおかつ/アジア経済研究  
究所地域研究センター)